

『強気なメイドのねだり方♥』

著: 森本あき

ill: 樹 要

「俺にも分かるように説明してくんね？ さっきから、おまえが何をやりたいのか、まったく分かんないんだけど」

「だから、賭けだよ、賭け。で、その賭けの条件が、じゃんけん、ってことになったの。いろんなのがあったのに。ストップウォッチで一分により近い秒数で止めたほうが勝ち、とか、サイコロで大きな目を出したほうが勝ち、とか、ブラックジャックで勝負、とか。なのに、よりによって、じゃんけんかあ」

「入れたおまえが悪いんだろーがっ！」

「だいたい、引け、と言われて、引いただけなのに、なんで文句を言われなきゃなんないんだ！」

「で？ じゃんけんて勝ったほうが好きなことできるの？」

「そんなのつまんないって。だって、ぼくが勝ったら、アイを囚われの身にする、で終わりじゃない？ アイだって、勝ったら、逃げるための道具をくれ、でしょ〜」

「…じゃあ、なんなんだよ」

「じゃじゃーん」

菊乃介は、もう一方の箱と、それから鍵の束を取り出した。鍵はかなりの数がある。「ぼくがじゃんけんて勝ったら、アイには、この箱に入っているクジを引いてもらって、そこに書いてあることをしてもらおう。あ、もちろん、セックス関係も入ってるからね。慎重に引いたほうがいいよ。アイ、クジ運悪そうだから」

「よけいなお世話だっ！」

アイはそう怒鳴ってから、はたと気づいた。

セックス関係も入ってるってことは、もし、万が一、じゃんけんて負けて、それを引いたら、セックスしなきゃなんないってこと!?

いや、待て、落ち着け。そんなの、ビンゴで引くはずがない。それよりも、じゃんけんて負けなきゃいいんだ！」

「で、アイが勝ったら、この鍵の中から、好きなのを一本あげる」

「なんの鍵なんだよ、それ」

「宝箱」

菊乃介はいたずらっぽく笑った。

「家のあちこちに、山を下りるために必要な道具が入った箱を五十個ほど隠してあるんだ。だけど、その箱の鍵は特殊加工してあるから、いくらアイでも、この鍵がなきゃ開けられない。当然、空箱も入ってるよ。アイがじゃんけんて強くて、運がよければ、ぼくに何もされないまま、この家を出て行ける。逆に、じゃんけんて弱くて、運も悪ければ、ぼくにいやらしいことをたくさんされる。だけど、そのぐらいのスリルがないと、賭けなんておもしろくないでしょ」

また、獲物を狙う肉食獣のような目。

ぞくり、と体が震えた。だけど、恐怖を悟られないように、アイはその目を見返す。

負けるもんか！

「ぼくだって、アイが、はい、どうぞ、とその体を差し出すなんて思っていない。無理やりやろうと思えばできるけど、それもつまらないでしょ？ だから、賭け。運が強いほうが勝つ、っていう、単純で、だからこそ、おもしろい賭けをしようよ。アイが勝ったら、黙って出て行かせてあげる。もう二度とさらわないし、追いかけない。だから、アイも、負けたら、ちゃんと引いたクジのとおりのことをして。それとも、怖いからやめる？」

挑(ちょう)発(はつ)に乗ってはダメだ、と理性は告げるのに。

強気で負けずぎらいな性格が、むくむくと頭をもたげた。

怖いけど、やめない。

怖い、なんて、絶対に言いたくない。

「おもしろそうだな」

余裕があるふりをして、アイはそう答えた。

「いいぜ。やってやるよ」

「じゃあ、約束して」

菊乃介はにこっと笑った。

「じゃんけんで負けるのも、クジを引くのも、アイの自己責任だから、何が出ても、ちゃんとそれをやるって」

「分かった。約束する」

きっと、変なのは引かない。菊乃介がいやがる、じゃんけん、を引いた自分のクジ運を信じよう。

絶対に、菊乃介が喜ぶようなものは引かない。

「あと、じゃんけんは一日一回ね」

「は!？」

アイは目を見開いた。だったら、はずれの鍵ばかり引いてた場合、五十日かかるってこと!？」

「ただし、一回のじゃんけんで、何本の鍵を賭けるかはアイの自由。五本でも、十本でも、好きなようにどうぞ。だけど、もし負けたら、クジも同じ数だけ引いてもらうよ。ちなみに、クジも鍵と同じ数だけ入ってるから」

一瞬、じゃあ、全部賭ければいいじゃん、と喜びかけて、それからすぐに冷静になった。

たしかに、五十本賭けて、勝てばいいけど。もし負けた場合、確実にセックスをされる。

引いたものには責任を持つ。

そうやってしまった手前、逃げられない。

「じゃあ、今日のじゃんけんね。何本賭ける？」

まずは様子見た。負けても、あまり実害がなさそうな本数にしておこう。

「三本で」

もし負けても、五十枚のうちの三枚なら、そんなにひどいことにはなるまい。

「へえ、意外」

菊乃介は肩をすくめた。

「アイのことだから、イチかバチかで五十本賭けると思ってたのに」

「うるさい」

こんな挑発には乗らない。
…まあ、じゃんけんに勝ったら、五十本賭けときゃよかった、と後悔はするだろうけれど。

「最初はグー、じゃんけん」
ホイ、で出したのは、アイがグーで、菊乃介がパー。
「ね、だから、クジ運が悪いね、って言ったでしょ」
菊乃介はパーのまま、手をひらひらと振った。
「ぼく、生まれてこのかた、じゃんけんに負けた記憶がないんだよね。アイに、じゃんけん以外を引いてほしかったのも、そういう理由。でも、しょうがないよ。神様はぼくの味方みたいだし」
「…そういうことは」
アイはふるふると体を震(ふる)わせた。
「先に言え、このバカーツ！」
「え、でも、ぼくが、いままで一度もじゃんけんに負けたことがない、って言ったら、アイは信じてた？」
「信じ…てないかもしれない…けど…」
信じないどころか、ホントはじゃんけんに弱いからそんなことを言ってるんだ、と、ほくそ笑んだ可能性もある。
「だったら、同じでしょ。それに、いままで負けてないだけで、これから負ける可能性はあるんだし。はい」
菊乃介は、満面の笑みで、箱をアイに差し出した。
「三枚引いてね」
アイは慫(ぶ)然(ぜん)としたまま、適当に三枚引く。
大丈夫。五十枚の中の三枚だ。どうせ、たいしたことはない。
「じゃあ、開けるよ。まず一枚目」
菊乃介が、クジを開いた。そこには、『メイド服で一日過ごす』と書いてある。
は？ は!? はーっ!?
メイド服って、あれか？ メイド喫茶とかで女の子が着ているようなのか!?
冗談じゃねーっ！

本文 p43～48 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>